旧満洲安東会会報に記された言語環境とアイデンティティ
ー『ありなれ』を用いたケーススタディーー

甲賀　真広

1.　はじめに

戦後 74 年が経ち、当時を知る者が少なくなっている。さらに、外地で生活した者の引揚げの際には、日記や写真などを持ち帰ることが禁じられたところもあり、そうした資料収集も出来ず、当時のことを知ることがますます困難になっている。これまでの研究は帰国・引揚げ後に書かれた個人の回想などの文献調査や、帰国者・引揚者からの聞き取り調査によってなされてきた。しかし、そうしたデータでさえも個人にあたる必要があり、入手が難しいというのが実情である。そこで、本稿では国会図書館にも所蔵されている、誰でも入手が可能な回想録『ありなれ』を用いて分析を行なうことにした。

本稿で分析対象とした『ありなれ』は安東会が発行する会報である[1]。安東会とは、満洲安東にゆかりを持つ者たちによる同郷の会である[2]。なお、かつて安東があった場所は現在中国丹東市となっている（図 1）。

図 1　中国丹東（満洲安東）地図

[1] 『ありなれ』についての解題、目次は松重(2013)を参照されたい。

[2] 満洲という場所は、関東州、南満州鉄道付属地、「満洲国」という 3 つの呼び方がされてきたが、当該地域を本論文では、全て満洲として記述する。なお、この記述による政治的なあるいはそれに類するような特段の意味は一切含んでいない。

その安東会によって 1956 年から毎年 1 号発行されているのが『ありなれ』である。「ありなれ」という名前は、満洲と朝鮮の国境を流れる鴨緑江が朝鮮語で「ありなれ」と呼ばれており、まさに国境の町であった安東にとって鴨緑江がシンボル的なものであったことに由来する。

『ありなれ』は、2019 年 1 月現在で第 62 号が最新号となっている。第 1 号から第 62 号には、同一の執筆者による記事が複数回掲載されている。しかし、同一の執筆者による掲載の傾向として、近い時期に偏りやすいことが筆者の目視による調査の結果わかった。例えば、12 本の記事が掲載されている大富俊一氏は第 38 号から第 47 号（第 45 号に 3 本の記事、他は各号 1 本）、13 本の記事が掲載されている丸尾敏夫氏は第 49 号から第 62 号（各号 1 本）というように、集中して掲載されていることが多い。また、掲載されている記事が 25 本と『ありなれ』の中でも最も多い大和田義明氏も、第 25 号から第 60 号である。大和田氏については集中しているというよりも、継続しているとする見方が正しいかもしれないが、いずれにせよ掲載号間は 36 号である。このように、同一執筆者による記事は、ある時期に継続的に掲載され集中しやすいのである。

一方で、その傾向とは異なる執筆者もいた。それが本稿で取り上げる岡田六郎氏である。岡田氏の記事は計 16 本が掲載されているが、初めての掲載が第 10 号(1966 年)で、最新号は第 53 号(2009 年)である[3]。したがって、掲載号間は 44 号となる。岡田氏は掲載されてから、2.75 号に一本のペースで掲載されていると言え、前述した各号 1 本ペースの大富氏や丸尾氏とは異なる。このように、初掲載から定期的かつ長期間『ありなれ』に掲載されている岡田六郎氏の記事を本稿では、分析対象とする。岡田氏の分析を通じて、かつてどのようなことばを聞いて生活していたかをうかがい知ることができた。また、ある執筆時点から別の執筆時点での論調の変化も確認することができた。このように本稿では、一人の人物に着目した観点からの考察を行なう。

なお、本稿では、二つの時代を考察するものであることを留意されたい。①満洲時代のことについてと②記述の変化についてである。①では 5 節でみていくように、当時の言語環境を中心に分析し、②では 6 節でみていくように、なぜ論調の変化が起こったのかをみていく。図 2 はこの分析観点を示したものである。ここで挙げたタイトルは、本稿で引用したものである。

[3] 岡田氏の記事が記載されたのは第 10 号、第 11 号、第 22 号、第 23 号、第 24 号、第 27 号、第 28 号、第 30 号、第 37 号、第 45 号、第 46 号、第 46 号、第 47 号、第 49 号、第 51 号、第 53 号である。

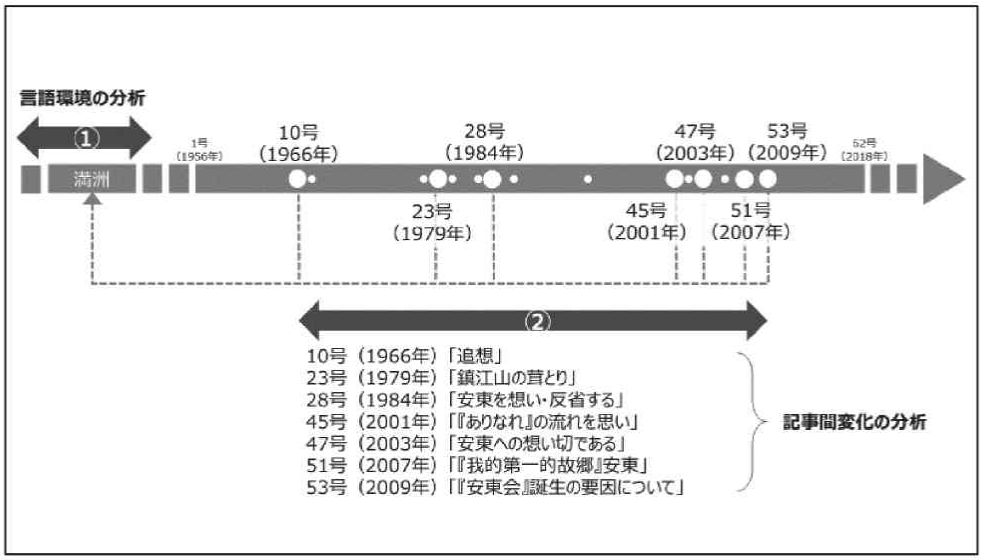

図２　会報の分析観点

2.　先行研究

満洲に関する社会言語学的な研究は、大きく分けると二つに分類される。一つ目は言語接触に関するものである。その例として、日本語と中国語が混ざったピジン的なものが挙げられる。これに関する研究は桜井（2015）に代表される。桜井(2015)は様々な文献を収集し分析を行ない、当時の接触言語をピジン中国語と位置づけている。また、金水(2014)では、「アルヨことば」と当時の接触言語の関連を探るために、満洲の言語使用の分析を行なっている。そして、張守祥(2012)は、戦時中の絵葉書や写真を手掛かりにして、そこにみられる言語景観から言語接触状況を分析している。その結果、日本人の人口が少なかったにもかかわらず、日本語による景観が非常に多かったことを指摘している。

満洲に関する社会言語学的な研究の二つ目は、日本語政策（日本語教育）である。軍レベルの日本語教育に関する論考には酒井(2018)があり、八路軍が対日戦略において日本語教育を重視しており、八路軍の全ての将校に幅広いレベルの日本語能力を有した人材を育成しようとしていたことを指摘している。そのために敵軍工作訓練隊を設立し、ここを卒業した者が前線で日本語教育工作に従事した。このように、日本語教育が戦争の戦略の一つに用いられていたことを明らかにしている。

一方民間のレベルでは、中国人に対して学校で日本語教育が行なわれた結果、日本語と中国語による日記の書き分けがなされていたことを指摘した高媛(2017)もある。その書き分けについて、「日本語の文章は文法上の間違いや誤記があるものの、基本的に優等生らしく丁寧に理性的に書かれているのに対し、中国語の文章は心理描写が多く、散漫に時には大胆に教員への不満をぶつける感情的な書き方をしている」ということを明らかにしている。さらに、同じ学校教育における日本語教育として、関

(1997)もある。関(1997)は日本語教育の歴史を概観する中で満洲を取り上げ、国語のひとつとして日本語教育がなされ、また、国家試験として制度化された「語学検定試験」が日本語普及政策の上でカンフル剤的役割を果たしていたことを指摘している。

既述のように、満洲の社会言語学的研究は、日本語に関するものが行なわれていることがわかる。つまり、満洲の社会言語学的研究にとって日本語が重要視されているということである。言語接触では、起点言語としての日本語、言語政策では、言語教育としての日本語である。しかし、ここで考えなければいけないことは、それがどのような日本語かということである。これについて、桜井(2015)で「在満日本語」として分析されているものの、甲賀(2018b)で指摘されている地域差にまでは触れられておらず、甲賀(2017a)で言及があった、その日本語を母語とした者たちのアイデンティティについても考察はされていない。さらに、満洲においては敗戦を機に、言語環境の大きな変化があった（甲賀 2018a）ということも重要であろう。そこで、本稿では安東という一地点で育った岡田氏に注目して、敗戦までの言語環境について、その言語環境で育ったことによるアイデンティティについて分析を行なった。

3. 社会言語学的な視点から会報という資料を扱う問題点や利点

本稿のもう一つの目的には、社会言語学的な視点から会報という資料を扱う問題点や利点を提示することにある。社会言語学の視点から引揚者の会報を分析した研究は、甲賀(2017c)があるが、会報を資料とするときの問題点や利点といった分析はなされていない。そこで、会報という資料をデータとして扱う際の問題点と利点を整理しておく。なお、ここでは特に、『ありなれ』についてみていく。

『ありなれ』には執筆者が明記されている。しかし、執筆者がわかっても属性がわからないことがある。この属性とは出身地や年齢、性別、職業、社会階層などを指す。『ありなれ』には、会員名簿が掲載されているものの、当時のことについては、住んでいた場所、親の職業以上のことが書かれていない。つまり、親の出身地やいつからいつまで安東にいたのかという情報はわからないことが多いのである。

しかし、属性についてわかるに越したことはないが、不明のままでも『ありなれ』は十分に価値があるといえる。属性がわからなくても、当時の言語環境の分析が可能だからである。詳細は後述するが、本稿では方言が使用されていた様子を確認できた。すなわち、方言が聞えてくる環境であったのである。こうした環境について、ヒラリー・クリントンは“It takes a village”と言う。これは、村が子を育てるということで、たった2人の親より、周り（環境）からの影響の方が大きいということを意味する。社会言語学にとっても、社会階層なども重要だが、まずはどのような言語環境で育ったかということが重要なのである。以下で言及する「コイネー」論と関係する阿部(2006)や朝日(2012)などは、この「村が子を育てる」という観点から外地における言語接触地帯を、両親の母語・母方言のみならず言語環境の全体像を明らかにするところから取り組んでいる。その言語環境がわかるという意味でも会報が果たす役割は大きい。

また、会報を分析する利点として、会報が「動的」であることが挙げられる。これまでも歴史的な研究は行なわれてきた。当時の資料を使って、現在の視点（論文執筆時点）から分析するというものである。これは、どちらも「静的」なものである。一方会報は、その発行の蓄積から、時代を追って分析することができる。つまり会報自体が「動的」なのである。また、同じ執筆者が複数回掲載されていることがよくある。既述の通り、本稿で分析する岡田氏もその一人であった。岡田氏の記事をみるとその初掲載から最新の掲載まで 40 年余り離れている。つまり、「動的」な会報から岡田氏個人の経年調査が可能ということである。例えば、後述するように、会報を分析することによって満洲に対する思いの変化によって記述の変化がみられた。このような変化はアイデンティティを探るうえで社会言語学的に重要なものである。しかし、同じ書かれた記録である自分史のような一冊のまとまった手記からでは、この変化を分析することができない。なぜなら、ある一時期に書かれたものでは、その時点の考え方を主観的に書くことはできても、客観的に分析できるものではないからである。それでは、このような変化を分析するにはどうすれば良いのかというと、これまでに蓄積されたものに頼るほかないのである。会報にはその蓄積があり、経年調査を行なうことが十分に可能なのである。

以上のように、属性がわからないことがあるという問題点をはらむが、それは言語環境を分析することによって補うことができ、「動的」な資料として経年調査が可能という利点があるのである。

4.　岡田六郎氏について

本稿で取り上げる岡田氏について紹介する。岡田六郎氏は安東生まれの安東 2 世である。生まれたのは 1918 年ごろで、2012 年に亡くなったことがわかっている。30 年近く満洲にいたという記述はあるが、安東だけで生活していたかどうかは不明ではある。しかし、『ありなれ』の中で他地域の様子について、安東のように詳細に言及しているところは見られなかった。他の場所について明確なのは、引揚先は新潟県柏崎だったということ、その後、香川県や福岡県にも移住していたということである。

両親の出身地や職業は不明で、どのような生活を送っていたかもわからない。しかし、先述したように重要なのは言語環境であり、その言語環境も彼の記事から知ることができた。詳細がわからない点もあるということを踏まえつつ、本稿では、岡田六郎氏を分析対象とする。

5.　個別記事の分析

個別記事を分析し、当時の安東の言語環境を探っていく。まず、岡田氏が記事内で自分の言語事情に関して言及したのは 7 本で、当時の日本語について言及したのが 2 本であった。言語事情に関する言及例として、中国語が話せなかったこと、終戦ではなく敗戦と言うことばを使うべきであることなどが挙げられる。以下では、当時の日

本語について言及されたものを取り上げて考察し、その言語環境でどのようなアイデンティティを形成したかを分析していく。

5.1　俚言を使用する日本人

まずは、当時の言語環境を分析する。次の例(1)は岡田氏が経験した日本語の地域方言についての回想である。ここでは、安東では各地の地域方言が使われていたことが書かれている。

例(1)

「茸」の名称も、内地の各地から集まった人々によりそれぞれ違っていました。「なば」という人もいましたし「たけ」と呼ぶ人もいました。

〔なばは中国・九州地方の方言〕

〔たけは「松たけ」「椎たけ」など万葉にも出ている古い言葉〕（岡田 1979、p. 19）

地域方言特有の単語や言い方を「俚言」という。例(1)は、「『なば』という人もいましたし『たけ』と呼ぶ人もいました」とあるように、安東では、「きのこ」のことを各地の俚言が使用されていたということを示すものである。ここで、言及された「なば」と「たけ」は、岡田氏も指摘しているように、確かにその使用地域が中国・九州地方を含め、広いことが図3でわかるが、むしろ相補分布しているということもわかる。

図3　「なば」「たけ」分布図（きのこの意）

図3をみてもわかるように、「なば」は九州を中心に分布しているのに対し、「たけ」は、山陰・東北・関東・中部の各地で使用されている。したがって、安東で使用された俚言は、内地の異なる地域のものであり、一つのものに対して、複数の俚言が使われていたということがわかる。このように、「なば」や「たけ」という多様性があったということは、方言接触が起こっていたとはいえ、まだ一つの形式へ収斂していなかったということである。一つの形式へ収斂していなかったということは、伝統が形成されず、多様性が受け入れられる環境であったということもうかがえる。

5.2　俚言を使用する中国人

安東における日本語では、「なば」や「たけ」に限らず、他にも各地の俚言が使われていたことが十分に考えられる。次の例(2)は、中国人が使っていた俚言を回想したものである。ここでは、安東の四季について言及しており、「栗ぬくい」という声が聞えたことを書いている。

例(2)

内地と違って満州の冬はきびしい、「栗ぬくい」という声が聞え、冬が来ると南満の安東の地でも、すべてが一種の冬眠に入る。建築の工事も、道路の工事も、町々の工事は来るべき春まで、一切の仕事をやめて眠に入ったようになります。（岡田1966、p. 20）

ここでの「栗ぬくい」の発話者は明記されていない。しかし、当時の社会的事情に鑑みれば、中国人であると考えるのが妥当だろう。したがって、栗を売る中国人が少なくともこの「栗ぬくい」ということばだけは覚えていたあるいは、このような簡単な日本語は習得していたということがわかる。また、ここでの「栗ぬくい」という発言で最も興味深いのは、「ぬくい（暖かいの意）」という方言が使用されているということである。『現代日本語方言大辞典』を基に作成した図4に、日本国内で「ぬくい」が使用されている地域を示す。

図４　「ぬくい」分布図（暖かいの意）

図４をみてもわかるように、「ぬくい」は主に西日本で使用されていることがわかる。つまり、中国人の商人は日本語の方言を生活の中で「自然習得」していたということである。また、この「栗ぬくい」についての特別な言及がないことから、安東では普通の言い方であった可能性がある。これは推測の域を出ないが、筆者が撫順出身の女性に行なった聞き取り調査でも、「栗ぬくい」という語を栗売りの商人が使っていたことがわかっている。これは方言接触の結果によるものであると考えられる。

また、図３と比較してみると、それぞれの使用地域で共通している部分が多いことがわかる。つまり、「なば」使用地域の人も、「たけ」使用地域の人もどちらも共通して、「ぬくい」という語彙を使用していたということである。したがって、「ぬくい」という語を聞く機会は多くあったのである。その結果、中国人が俚言を習得することにつながったのだろう。

このように安東では、「なば」・「たけ」や「ぬくい」という内地の地域特有の言い方、俚言が使われていたということがわかった。つまり、安東における日本語は、語彙だけをみてもいわゆる標準語とは異なった体系を有していたといえるだろう。なぜなら、日本各地から集まった人たちが、集住して暮らすことにより、それぞれの地域の方言が使用され、方言接触が起こったからである。ところが、方言接触は単純に1＋1＝2 ということではない。新たな言い方が生まれる 1＋1＝3 の場合もあれば、どちらかの言い方に収斂することで 1＋1＝1 ということもある。いずれにせよ、安東では方言接触の「コイネー日本語」が使われ、それを中国人商人も自然習得していたの

である。では、このような「コイネー日本語」という内地とは異なる特殊な言語環境に育った岡田氏は、どのような意識を構築していったのだろうか。

5.3　岡田氏の帰属意識

「コイネー」とは、日本の西にも東にもない、世界でどこにもないことばがクリエイトされるということである。これまで小笠原諸島やサハリンといった外地における言語接触地帯においても「コイネー」の発生が確認されている(阿部 2006、朝日 2012)。安東では内地にはない新しい日本語が生まれていたと考えると、内地のどこでもない帰属意識が生まれるということが考えられる。新しいことばの環境、「コイネー日本語」環境で育った岡田氏の帰属意識がわかるのが、次の例(3)である。

例(3)

私は、いや私たちといった方が正確だと思いますが、日本に上陸して「引揚者」というのが私たちにつけられた名称であることを知りました。内地の人々の口にするこの言葉には、リュックサック一つの乞食に近い貧乏人の群れといった風なものと、遠い満州くんだりまで出稼ぎに行ったむくいだと、いった一種の侮辱が含まれていたように思ったものです。

「引揚者」として日本に帰って来たといっても、満洲のあの国境の町で生まれ、あの鴨緑江の流水や鎮江山の夜桜を見て育った私には日本は確かに祖国であり、母国であっても、故郷ではなく何の思い出もない、いわば無縁の土地にすぎないのです。

日本に引揚げたのではなく、日本に帰って来たのでもなく、西も東もまるっきりわからない日本という国に放り出されたといった方がいいと思います。

かつて日本に生まれ育って海外に出た人たちにとっては、確かに引揚げであり、故国日本への帰還であると思いますが、私たちにとって日本は父の国、母の国であっても、それは異境にすぎないのです。

(中略) ただ全くの異国でないのは、そこに住む人々が私たちと同じ日本人であり、同じ言葉を使うということです。 (岡田 1966、p. 19)

「日本」に対して、「西も東もまるっきりわからない日本という国」、「父の国、母の国であっても、それは異境にすぎない」というイメージを持っており、自身の帰属意識について、日本人であるとしているものの、それはいわば「大陸育ちの日本人」ということであって、「内地の日本人」とは別の帰属意識なのである。このように、岡田氏は日本に対する無縁さ、日本の異境さを繰り返すことにより、安東に対する帰属意識を強く持っていることがわかる。このような強い安東への想いは、引揚げから約 20 年経過してもなお持ち続けていたのである。

本稿における分析では、岡田氏のこの帰属意識が重要となる。なぜなら岡田氏はこの初掲載の 1966 年から一貫してこの立場をとっているからである。一貫した安東への帰属意識があるからこそ、記事間の変化を読み解くことができるのである。

6. 記事間の変化の分析

6.1 中国人への理解不足

既述したように岡田氏は「大陸育ちの日本人」という帰属意識、強い安東への想いを持っていることがわかった。しかし、これが書かれたのは敗戦からおよそ 20 年経てからである。それでは、さらにその後、安東への想いはどのように変化をしていくのだろうか。次の例(4)、例(5)は同じ記事「安東を想い・反省する」から抜粋し、1984 年時点の岡田氏の考えを確認する。

例(4)

私が初めて中国語を習ったのは小学生の五年の時だと思う、その後「官話急就篇」（宮島大八編）という、中国語を習った人は一度は手にしたであろう、文庫本位いの小冊子である。五十数年後の今日中国語をはじめて、改めて痛感したのは、私が中国についても中国人についても何にも知らなかったということである。生れてから三十年決して短い期間ではない、にも拘らず片言の中国語も碌に話せないし、中国人の生活もまして中国人の心など何にも知らなかったことを思い知らされたのだ。（岡田 1984、p. 25）

例(5)

日本の植民地での中国人の生活がどんなものだったか、冬になると町のあちこちに凍死者が転がっていたが、それがどんなに悲惨かということに考え及ばず、単に中国はまだそんな未開の国と理解していたのではないか。

中国語を少しも話せない人でも「慢慢的」（マンマンデー[4]）と「没法子」（メイファーズ）位いは知っていると思う。中国人は大陸的で 悠長でのろまで 怠慢な国民だと 思ったり。何事にも諦めのよい無気力な国民と理解していたのではないか。（岡田 1984、p. 26）

岡田氏がその目で見た安東の生活をこのように振り返っている。岡田氏はことばだけでなく、生活も心までも何も知らなかった。さらに、中国を未開の地としてとらえ、中国人も無気力な国民と見下しさえもしていたようである。1984 年の記述を概括すると、自身の経験を振り返り、当時の自分は中国人のことを理解することができておら

[4] 「マンマンデー」については、甲賀(2017b)で「マンマンデーだぞ」という言い方が安東で使用され、見下すような意味合いがあったということが指摘されている。

ず、誤った見方までしていたということになるだろう。これについて岡田氏はこの記事を通じて、反省しているのである。

6.2　内地流入日本人への哀れみ

しかし、このような理解不足と誤った見方という記述は変化することになる。次の例(6)も日本人が中国人を見下していたとするものであるが、1984 年時点では自身を見下した日本人としていたのにもかかわらず、例(6)の 2001 年時点では岡田氏が含まれていないのである。

例(6)

安東の町が出来て行く様は、丁度アメリカの西部開拓時代の様に、町の人々自分等の町を自分等の手で造るのだと言う、行動力と情熱が有ったのではないか、私が多少でも自治とか自主の精神、自由とか平等と言うものを身に付けることの出来たのは、安東と言う町で人間形成に最も大切な時期に、あの活気溢れたなかで育ったせいだと思います。

私たちが幼年期から青年期にはまだ安東の町づくりに活躍していた人々が多く生存しており、その人々の息吹に常に接していたのが影響したのではないかと思います。

こうした開拓者精神に溢れていた町にも、内地からの人々が流入して来るにつれて、勝者の傲慢・不遜と島国根性の偏狭・尊大から、朝鮮人や支那人を自分等より下等な民族として蔑視し徒に偉ぶったのではないか、私達の様に安東で生れ安東で生(ま)った(ま)、所謂、二世には、余りこうした感情は少なく人間は皆平等と言う気持ちで、この内地からの流入者の人々の横柄な態度を悲しく見ていたものです。それは自分が半分は支那人だと言う様な想いが心の何処かにあった様です。

その証拠には日本に引揚げて来て半世紀以上になるのにまだ外国に来ている様な気分があり、まだ完全には現地日本人にはなりきっていないのではないか、何時までも異邦人の想いなのです。この異邦人の眼で見ているせいか、日本の日本人の良い処も悪い処も客観的に見る事が出来る様に思うのです。（岡田 2001、p. 85）

例(4)、例(5)と違い、自身は「多少でも自治とか自主の精神、自由とか平等と言うものを身に付けることの出来た」とし、「内地からの流入者の人々の横柄な態度を悲しく見ていた」のである。また、この例(6)の時点でも、自身は「安東で生れ安東で生った（育った）二世」としてとらえており、「内地から流入して来た勝者の傲慢・不遜と島国根性の偏狭・尊大を持つ者たち」とは明確に区別している。

西部開拓時代のアメリカを取り上げているが、偶然にも、当時のアメリカでは「コイネー」が生まれており、類似した言語環境で生活したものとしても通ずるものがあったのかもしれない。しかし、ここでは、岡田氏は中国人への理解不足があったり、

見下していたりしていたということが書かれていない。つまり、論調の転換が起こっているのである。自身の反省という論調から、内地から来た日本人への哀れみという論調である。この内地流入日本人への哀れみの論調は継続することとなる。次の例(7)、例(8)は、例(6)から2年後、6年後の記事である。

例(7)

日本人は日露戦争で得た利権により、日本内地から来たいわば征服者で、中国から見れば侵略者で、五族では一番上と思い上がっていた。優れた民族と己惚れた心は、他の民族を蔑視して、傲慢不遜、すっかり逆上せ上って振る舞っていた。この大陸で生れ育った私は幼い頃から中国人には親みを持ち、いわば同胞としての愛情を抱いていたが、内地から来た日本人の中には、当時の支那人は自分より下等の民族として、時には人間扱いにもしていなかった。

私はこうした有様には悲しい思いと憤りを持ち中国人に同情していた。偉そうに振る舞う日本人を情けなく思っていた。（岡田 2003、p. 57）

例(8)

日本人は支配者で朝鮮人、支那人を下の民族として振る舞い蔑視していた。特に内地から来た人にこの傾向が強かった。これは同じ日本人として恥ずかしく情けなかった。

この地で生れ育ち長年暮らしを共にして来た者と、島国的偏見の中で育った者との違いであろう。私たちは幼い時から支那人、朝鮮人は友人で同僚であった。兄姉同様で支那語で言えば、「好朋友」である。（岡田 2007、p. 39）

例(7)でも例(8)でも主張は同じである。それは、内地流入日本人が思い上がり、他民族を蔑視している様子を大陸育ちの私は哀れみ、他民族に同情していたということである。これは、やはり例(6)の主張と同じ、内地流入日本人への批判である。さらに、例(6)では「悲しく見ていたものです」とし、例(7)では「私はこうした有様には悲しい思いと憤りを持ち中国人に同情していた。偉そうに振る舞う日本人を情けなく思っていた。」としているように、「悲しい」という感情のみを記していたところから、「悲しい思い」「憤り」「同情」「情けなく思う」と様々な言葉をもって主張するという変化も見せている。そして、例(8)でも「これは同じ日本人として恥ずかしく情けなかった。」とし、自身の帰属意識を「この地で生れ育ち長年暮らしを共にして来た者と、島国的偏見の中で育った者との違いであろう。」と明確に区別したうえで、「私たちは幼い時から支那人、朝鮮人は友人で同僚であった。兄姉同様で支那語で言えば、『好朋友』である。」とあえて中国語を用いて強調している。例(6)から例(7)、例(7)から例(8)へと徐々に、語気を強めるという変化があるのである。

6.3　変化の要因

上述したような記述の変化はなぜ起こったのだろうか。「中国人は大陸的で悠長でのろまで怠慢な国民」で、「何事にも諦めのよい無気力な国民と」考えていたように、見下すような見方をしていた。それが、「日本人は支配者で朝鮮人、支那人を下の民族として振る舞い蔑視して」おり、「同じ日本人として恥ずかしく情けなかった」とあるような内地流入日本人への哀れみとして、自身のことには触れなくなったのである。この記述の変化は、当然のことながら一つの要因をもって、それが原因であるとすることはできないだろう。複数ある要因によって、この記述がなされているからである。そこで、考えられる要因を2つ提示する。

まず1つ目に、岡田氏の帰属意識が要因となっているということである。岡田氏の帰属意識は安東2世としての「大陸育ちの日本人」ということであった。これは、初掲載時の第10号(1966年)から、最新の掲載時点の第53号(2009年)まで変化がなかった。つまり、この「大陸育ちの日本人」としての帰属意識が、後年になって強まり、内地流入日本人と区別したかったからではないだろうか。つまり、私は「大陸育ちの日本人」だから、「半分は支那人」だから、中国人とは同胞だから、と自身のアイデンティティを強調したかったと考えられる。そうして一度書いた内容から、十数年を経て、内地流入日本人を悪者のようにして書くことで、「日本内地から来たいわば征服者」の日本人と、岡田氏自身が属する「大陸育ちの日本人」とを明確に区別することを意識的あるいは無意識に行なったのではないだろうか。

2つ目に考えられる要因は、岡田氏の安東への強い想いがあったことである。岡田氏は『ありなれ』の発行元、安東会が誕生した要因について次の例(9)のように考察している。

例(9)

「安東会」の生れた原因について思いつくままのことを申しあげて参いります。

その要因のひとつは住んでいた人々が安東を好きで深い愛情を持っていたことです。

それは内地の人たちが抱いている郷土愛では違い異国の地なれば持っている熱い想いです。（岡田 2009、p. 59）

このように、安東会が誕生した要因のひとつに、「住んでいた人々が安東を好きで深い愛情を持っていたこと」、それは「異国の地なれば持っている熱い想い」であったことを述べている。当然、岡田氏自身も、安東に対する熱い想いを持っているということだろう。晩年になってから自身の家族について調べたり、自身のルーツに対して興味が湧いたりするということは、たびたび耳にすることであり、これは生活的にも経済的にも落ち着いたころに、故郷を懐かしむ気持ちが強まるということであろう。晩年になれば肉体的に移動自体が困難になっていくことが容易に想像できるが、安東の場合、移動ができたとしてもかつての満洲安東はもうない。甲賀(2018c)では、2017

年6月に、戦後に安東から引揚げてきた女性とともに、かつて安東があった場所、中国丹東を訪れている[5]。彼女にとってその時が引揚げ以来の再訪であったが、「全然懐かしくない」という言葉を口にしていたのである。つまり、かつての面影はなくなり、別の町になっていたのである。この「懐かしくない」という感覚は引揚者にとって大なり小なり共通したものだろう。岡田氏も行きたくても行けないかつてのあの安東に対して、次第に思いが募っていき、熱い想いを抱くようになったのだろう。こうした熱い想いに比例するように、例(5)から例(6)という論調の転換、例(6)、例(7)、例(8)の語気を強める変化が起こったのではないだろうか。

このように岡田氏の帰属意識、安東への想いなどの要因が絡み合って、記述の変化に至ったと考えられる。

7. おわりに

本稿では、安東2世の岡田六郎氏に着目して分析を行なった。岡田氏が育った安東は、「なば」や「たけ」、「ぬくい」といった日本各地の俚言が使用されたという言語環境であった。つまり、標準的な日本語ではなく、異なる体系を持った「コイネー日本語」が生まれ、使われていたのである。そのような特殊な言語環境に育った岡田氏の帰属意識も、安東2世としての「大陸育ちの日本人」というものになっていた。

また、長年大陸に住んでいたにもかかわらず、「中国人のことを理解していなかった」、「中国人のことをのろまで、怠惰で、無気力」といったような見方をしていたと書きながら、その十数年後にこれのような振る舞いは、内地から流入して来た日本人の振る舞いであるとしている。このように、岡田氏の記述は変化していることがわかった。この変化の要因には、帰属意識や安東への強い想いなどが反映されていると考えられる。甲賀(2016)では同じ安東出身者に対して聞き取り調査を行ない、そこで得られたデータを分析対象としている。調査者の聞きたい課題についてピンポイントで聞くことができるという点で、半構造化インタビューの利点があり、一方、今回の数十年にわたる回想録を分析することで、「記憶」の中の記述の変化（図2参照）を分析できるという長所があった。

このように『ありなれ』を通じて、安東の特殊な言語環境、その言語環境で育った安東2世が持つ意識を読み解くことができたといえるだろう。

本稿では、複数回記事が掲載されている、長い期間にわたって掲載されているという2点の理由から、岡田六郎氏に注目した。こうした経年調査は、これから始めようとしても調査に時間を要するため現実的ではないし、過去に戻って調査しようとすること自体が不可能である。つまり、定期的に発行されている会報ならではの調査方法と考えられる。本稿では、これまで社会言語学において行われてこなかった新たな資料、会報を用いた分析が有効であることも示すことができた。引揚者団体の解散が増

[5] 同行した引揚者は安東会に属してはいるが、岡田氏とは別の人物である。

加する中、彼らの発行してきた貴重な資料をデータとすることで、会報の価値を再確認することができたといえるだろう。

満洲に関する同郷の会による会報は、安東会の『ありなれ』だけではなく、さまざまな地域のものがある（佐藤ほか 2016、大野ほか 2015 など参照）。したがって、これらを用いた満洲の各地域の言語環境やアイデンティティ分析が可能ということである。言い換えれば、各地域出身者によって蓄積されてきた会報から限られた言語情報を抽出・分析することで、満洲の言語体系の全体像を復元することができるのである。

引用文献

岡田六郎(2009)「『安東会』誕生の要因について」『ありなれ』53、pp. 59-61
————(2007)「『我的第一的故郷』安東」『ありなれ』51、pp. 38-39
————(2005)「古い時の国境の町の思い出」『ありなれ』49、pp. 106-107
————(2003)「安東への想い切である」『ありなれ』47、pp. 54-59
————(2002)「敗戦と言う言葉を（終戦というまやかしは止めよう）」『ありなれ』46、pp. 58-60
————(2002)「花房千秋さんを偲びて」『ありなれ』46、pp. 61-62
————(2001)「『ありなれ』の流れを思い」『ありなれ』45、pp. 83-85
————(1993)「安東県の春」『ありなれ』37、p. 59
————(1986)「鎮江山と鴨緑江」『ありなれ』30、pp. 26-27
————(1984)「安東を想い・反省する」『ありなれ』28、pp. 25-27
————(1983)「安東市街図を眺めて」『ありなれ』27、pp. 30-31
————(1980)「筏焼とほまれ干」『ありなれ』24、pp. 19-21
————(1979)「鎮江山の茸とり」『ありなれ』23、pp. 19-20
————(1978)「鴨緑江の水」『ありなれ』22、p. 19
————(1967)「ありなれを見て」『ありなれ』11、pp. 21-22
————(1966)「追想」『ありなれ』10、pp. 19-20

参考文献

朝日祥之(2012)『サハリンに残された日本語樺太方言』、明治書院
阿部新(2006)『小笠原諸島における日本語の方言接触－方言形成と方言意識－』、南方新社
大野絢也・尹国花・湯川真樹江・飯倉江里衣(2015)「『大連会会報』記事目録」『満洲の記憶』第 2 号、「満洲の記憶」研究会、pp. 14-101.
高媛(2017)「戦前期満洲における中国人青年の学校生活－南満中学堂生の『学生日記』（一九三六年）から－」『日記文化から近代日本を問う－人々はいかに書き、書かされ、書き遺してきたか－』田中祐介編、笠間書院、pp. 397-426

甲賀真広(2018a)「旧満洲国公主嶺における日本人の言語経験－終戦を境にした言語使用状況のパラダイムシフト－」『日本語学会 2018 年度秋季大会予稿集』pp. 123-130

甲賀真広(2018b)「日中戦争期の学校教育を通じた意識構築－旧満洲国引揚者への聞き取り調査から－」『新世紀人文学論究』第 2 号、新世紀人文学研究会、pp. 157-173

甲賀真広(2018c)「旧満洲国の多言語環境に関する社会言語学的研究」首都大学東京修士論文

甲賀真広(2017a)「フレーミングとフッティング理論から言語と自己形成の関連性を探る－旧満洲国の日本人住民のアイデンティティー」『第 39 回社会言語科学会研究大会 予稿集』pp. 70-73

甲賀真広(2017b)「旧満洲国在住者の言語接触史－文字資料とオーラルヒストリーのインターフェースを目指して－」『日本語研究』第 37 号、pp. 105-120

甲賀真広(2017c)「回想録の社会言語学的研究－引揚者たちの会報『ありなれ』を資料として－」『第 36 回韓国日本語学会予稿集』pp. 201-206

甲賀真広(2016)「協和語の言語環境に育った人の記憶をたどる－旧満洲国の日本人住民のオーラルヒストリーから読み取る言語接触史－」『日本語学会 2016 年度秋季大会予稿集』pp. 25-32

酒井順一郎(2018)「八路軍の戦場に於ける日本語教育と日中相互文化交流」『新世紀人文学論究』第 2 号、新世紀人文学研究会、pp. 37-56

佐藤仁史・浅野慎平・井崎伶香・大賀友果梨・奥田有理・熊野壮真・久保篤史・笹川純平・佐藤珠貴・坪井俊樹・西村悠作・真門美里・弓田潤(2016)「岡山ハルビン会会報－『わが心のハルピン』記事目録－」『満洲の記憶』第 3 号、「満洲の記憶」研究会、pp. 31-58

真田信治・ロング、ダニエル(1992)「方言とアイデンティティー」『月刊言語』第 21 巻 10 号、大修館書店、pp. 72-79

関正昭(1997)『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク

張守祥(2012)「満洲国地域における言語接触－写真資料からみる日本語普及史－」首都大学東京博士論文

平山輝男編(1992)『現代日本語方言大辞典』明治書院

松重充浩(2013)「『ありなれ』(第 1～56 号) 総目次」『近現代東北アジア地域史研究会　NEWS LETTER』第 25 号、pp. 79-100

（こうが　まさひろ・首都大学東京大学院博士後期課程）